



●横山さんのタマネギ畑は全部で13ha。そのほかに、水稲(もち米)とビート、小麦の栽培を手がけています。「農業経営上のリスク分散をする意味でも、ほかの作物を栽培することは大切だと思います」



●コンテナに積み込まれ、あとは出荷を待つだけのタマネギ。横山さんは現在、4品種を栽培しています。



明日を語ろう! 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●全国一のタマネギ産地を支える生産者スピリット

タマネギの一大産地としての誇りが 飽く無き挑戦を続ける力に。 「安定供給とニーズに特化した生産」 どちらにも応えるのが生産者の責任」

「北見市端野町」

有限会社横山農産

取締役

横山 敦史 さん



若手生産者をリードして 品質の向上をめざす

道東の北見市北部に位置する端野町地区は、冷涼で日照時間が長い気象条件や、肥沃な土壌など、タマネギ生産に向いた地域性から、全国でも有数の生産量を誇ってきました。現在、広く流通しているF1品種「オホロック」が開発されたのも端野の地。先駆者としての思いがあるだけに、「この地域はタマネギづくりにかけるプライドが高い」と父親の代から生産を手がける横山敦史さんは言います。

道的に活動していました。JA合併後は「玉葱振興会青年部」に所属。部長も務め、タマネギの品質を向上させる活動に取り組みました。「広域なエリアがつのJA組織になったことで、タマネギは共選形式の北見ブランドとして集約されましたが、品質は地域によるバラつきがありました。それをすべて「北見たまねぎ」として市場に出しているのだから、と疑問を持ち、品質を定レベルに引き上げようと働きかけました」

特別栽培や環境負荷の軽減 消費ニーズに合った生産も

現在、タマネギの生産は厳しく管理されています。以前は、豊作と不作の差が激しい年もありましたが、生産技術の向上な

新しい技術の導入にも挑む 理想は子どもが憧れる農業

横山さんが、最もこだわっているのが土づくりです。端野町地区は酪農家が少なく、堆肥の購入も割高になるため、土中の有機物が少なくがちに。横山さんは酪農家の友人から堆肥を安価で譲り受け、十分な量を畑に与えているそうで、「これも大切な経営努力」と笑います。さらに、収穫後はキカランなどの緑肥を植えることでも有機物を補い、化学肥料の使用を減らす取り組みを続けています。



●常呂川がすぐ横を流れる広大な畑。川が氾濫すれば畑が冠水するリスクがありますが、水の恵みを受けてよく肥えた土質が、おいしいタマネギを育ててくれます。



●育苗用のハウスと特別栽培の畑の土に、培養した菌を入れることで土質改善を試みています。

※本誌の裏表紙に横山さんの息子さんがかいたタマネギ畑での農作業風景が掲載されています。こちらもご覧ください。

●横山さんは10年前から実家の農業に携わり、若手リーダーとして地域の農業を牽引してきました。「新しいことは自分が真先に挑戦したい、というタイプ。生産地としても、ほかの地域には負けたくないですね」

